©2022 YHAL, YITP, Kyoto University
京都大学基礎物理学研究所　湯川記念館史料室

人類を救う唯一の道

世界連邦大会を終わって

鮎沢巖（あゆさわいわお）

八月二十四日から一週間にわたって東京と京都で開かれた世界連邦世界大会は新聞、ラジオ、テレビなどからも意想外の熱烈な支持を受け、空前ともいえる盛大な会合を終えていわば成功裏に幕を閉じた。参加国数からいえばわずか二十カ国で、しかも大部分が西ヨーロッパ系統の諸国（アメリカ、カナダを含めて）が大多数であって来るはずであったアフリカの諸国からついに一人の代表の参加もなかったこと、アジアもインドと韓国ぐらいのもので、人数からいっても西欧系諸代表が圧倒的な多数を占めていたということはまことに遺憾であった。とはいえそれらにはやむをえない事情も重なっていた。それをいまここにかぎられた紙面で論議する必要もあるまい。むしろこの大会の収穫の面に目をそそいで、その特筆さるべきことの若干をあげてみよう。

イギリスから八十三歳の老躯（躯）をひっさげて前労働党首、元総理アトリー卿がこのためはるばる来日され、東京と京都においてあの老齢にかかわらず、実に壮者をしのぐ元気をもってしかし（獅子吼）され現在の国際危機から戦火の突発を防止し、人類を破滅から救いうる唯一の道は世界連邦よりほかにないと叫ばれたことは、聴衆のすべてに深い感動を与えた。自分の生涯のうちにいくつもの夢が現実となっている世界連邦が、いまや現実となりつつあるとみるのは私の感激であるとうんぬんと述べられたことのごときは、あの日比谷の大会堂を埋めた若き聴衆におそらくはかつて経験しなかったインスピレーションを与えたことであったと思われる。

世界連邦世界協会会長湯川秀樹博士が開会に当たってされた基調講演は、世界が戦争の惨禍から救われ、平和と秩序と繁栄の世界を築くためには、核時代にはいった歴史の現段階にすべての国々がその政策に取り入れてその実現に努力しなければならない要因をあげたものであった。

博士はそれらの諸点を懇々と説かれたあと、この会議の議題のそのすべてがいずれも世界連邦主義にテイ身しているものに向かって、その英知と卓見と献身とにたいするチャレンジであるということばをもって結ばれた。

筆者はこの大会が湯川博士のいわれたチャレンジにこたえて立ちあがったと思う。それがこの世界大会の成果を生んだものと信じる。

では具体的にはその大会からどういう宣言が発表され、どういう行動が起こされているかという質問になるが、日本における世界連邦世界大会が真に画期的（エポック・メーキング）であったといいうるためには、どうすればよいかという問いにたいし「世界法による世界平和」と題した記念碑的な大著の著者で、世界的権威であるグレンビル・クラーク博士がいっているように、それは内容のばくぜんとした宣言や単なる一般論（ミア・ゼネラリティース）を決議に並べたりすることは絶対に避けて、世界から戦争というものが影を没して、人類が絶滅のわざわいから免れるために欠くことのできない必要条件または措置を明示することが必要である。

それらは東京宣言に盛られ、コペンハーゲン提案への、こんどの世界大会が採択した国連憲章への訂正（案）に具体的に条項に分けて取り上げられているので、ここにいちいちそれを列記したり、解説したりすることを筆者は試みないが、要するに世界各国が笹川太郎氏が開会の冒頭に提案されたように日本国憲法にうたわれている交戦権の放棄を日本語で端的にいえば「国是」とすること、列国が軍備を全面的に撤回すべく、それを可能にするために経済面の措置をまずじゅうぶんに考慮して断行するというような事項はいずれも見のがしてはならないものである。（国際基督教大教授、世界連邦大会日本代表委員）

c084-016-050